

初登攀記録

- 明神岳五峰東面中央壁（赤壁）信大ルート初登攀
..... 小松英夫、故 畑中滋光
- 赤沢岳猫の耳尾根積雪期初登攀
..... 清水一治、故 平沢行哉
- 利尻岳南稜積雪期初登攀..... 小松英夫、故 平沢行哉
- 前穂高岳東壁右岩稜左カンテ初登攀
..... 山田和彦、池田直弥
- 前穂高岳北尾根第六峰奥又白側岩壁初登攀
..... 出島五郎、池田直弥
- 前穂高岳東壁Dフェース信大ルート開拓
..... 故 片岡 格、小谷雅宣
- 前穂高岳第一尾根下又白谷アルファルンゼ奥壁初登攀
..... 新谷 剛、岡村知彦

明神岳五峰東面中央壁（赤壁）信大ルート初登攀

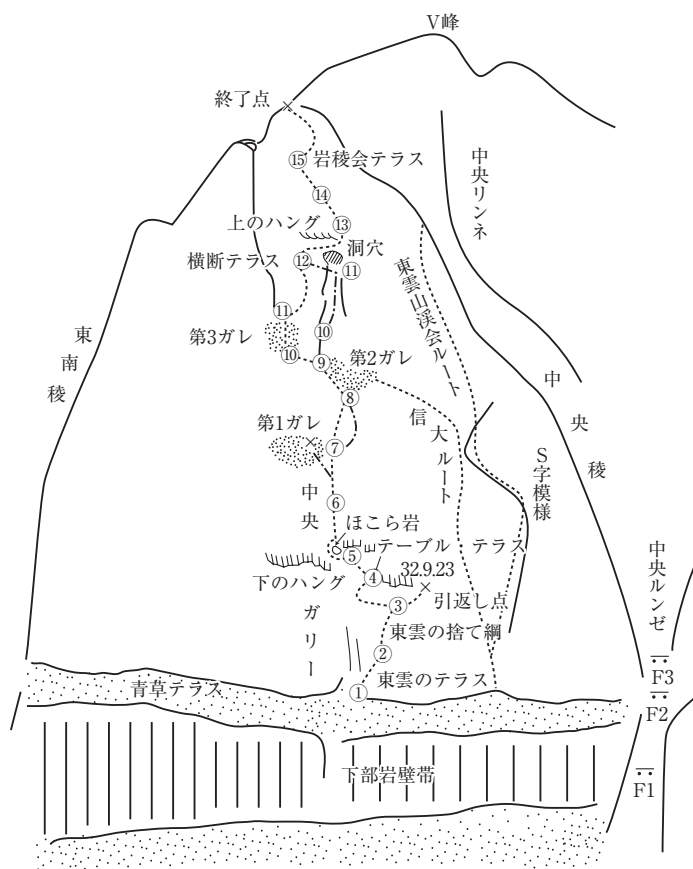
昭和27（1952）年7月8日～9日

小松英夫
畑中滋光

報告 No.1 には、昭和27年度の山行記録に「7月8日～9日 明神岳東壁中央リッペ」小松英夫、畑中滋光」とだけあり、小松英夫先輩に確認したが、詳細な記録は古い昔であるので、無いとのことであった。

“（株）東京創元新社刊、「現代登山全集2 槍 穂高上高地」の163頁、明神五峰赤壁登攀小史”には、この事実の記載があるので、これを引用し掲載する。ルート図についても同誌掲載の岩稜会作成のものである。

..... 秋のルート
 - - - - - 冬、春のルート
 (⑨-⑬が信大ルートと重なっていると考えられる)



明神岳五峰東面中央壁ルート図（岩稜会作図）

明神五峰赤壁登攀小史（中央ルート関係のみ）

一、昭和 27 年 7 月 8 日～9 日

信州大学山岳部……小松英夫、畑中滋光

上高地より出発。下部岩壁の右方から青草テラスに出、中心線と中央稜のほぼ中間部より取り付く。ジグザクの登行を繰り返しながら、中央バンドに出、ここより左にトラバースして中央ガリーに入り、岩溝の右端から洞穴に達する。洞穴を越えたところより中央稜よりにルートを取り、稜線下三ピッチで日没となりビバーク。翌日、林のような這松地帯を通過して五峰に達し、前明神沢右俣を経て上高地に帰る。

二～四、省略

五、昭和 35 年 10 月 9 日～10 日

岩稜会……高井利恭氏他 3 名

中央ルート無雪期初登

六、省略

七、昭和 36 年 3 月 23 日～25 日

岩稜会……高井利恭氏他 3 名

中央ルート積雪期初登

（注）本小史（一）にある信大の登攀の事実を私達が知ったのは、昭和 38 年の正月、上高地において、信大 OB 小松英夫氏から直接話を聞いてからであった。ルート概要のピッチ⑨から⑪が私達の春のルート、ピッチ⑫が秋、春のルートと一致していると考えられる。数本のハーケンを打ち残したとのことであったが、私達の登攀の折には、前登攀の痕跡は何も発見しなかった。しかし、ピッチ⑫の岩の脆さ、およびピッチ⑨～⑪は春には殆ど雪に埋没していたことから考えて、これは十分納得のいくことである。

編集委員会注、文章中の私達とは岩稜会のことである。

赤沢岳猫の耳尾根積雪期初登攀

昭和 28 年（1953 年）3 月 14 日

清水一治
平沢行哉

詳細報告は、報告 No.1「白馬—穂高縦走、針ノ木サポート隊報告」に掲載しているので、ここでは、アタック当日の様子を掲載する。

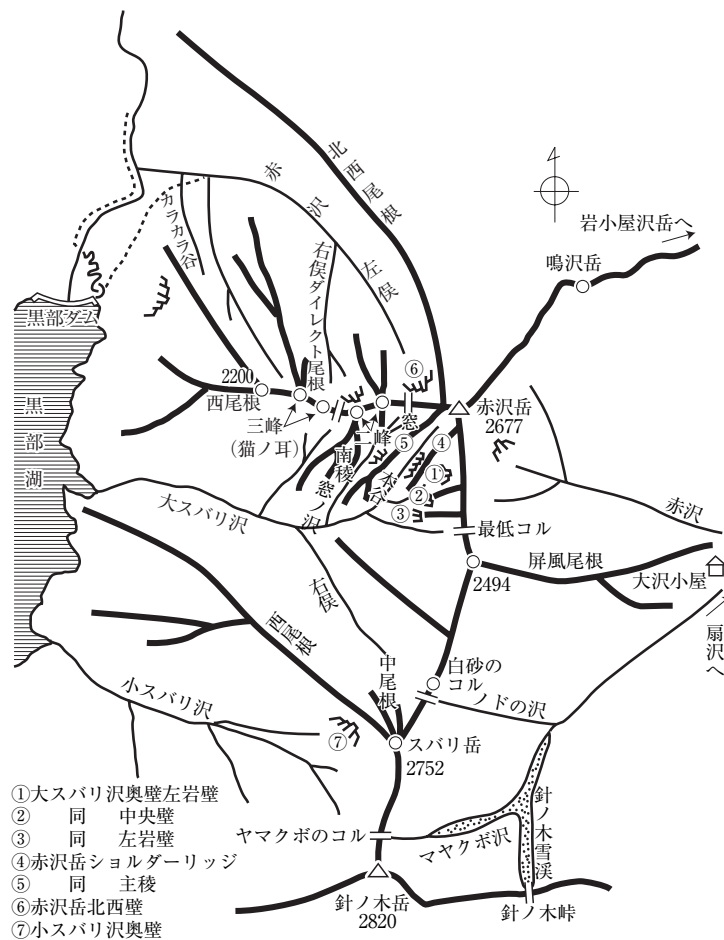
猫の耳アタック（積雪期初登攀）

アタックパーティー 清水一治、平沢行哉

プロテクトパーティー 平井満夫、樋口清明

吹きすさんだ雪もおさまり、山は漸く晴れ上がる気配。9：35、赤沢岳頂上のテントを飛び出し、昨日偵察したルンゼを下る。昨日決めた取り付きで小休止。仰げば氷雪を、その荒々しい肌にとまった尾根は、忍苦の後に報われる登攀の喜びを約束されているかの如く映える。「よし登るべ

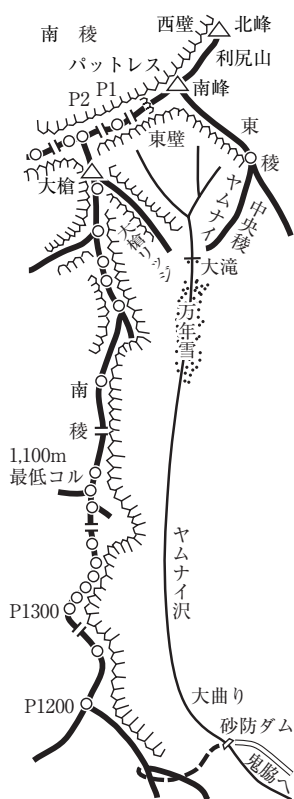
エ」平沢とアンザイレンする。平沢の眼は、未だ人間の触れざる氷雪にふれる喜びと不安で輝く。マッチ箱のような岩頭下に聳える 100m ばかりのフェースを清水トップで登る。リスは見当たらず、一昨夕の新雪が氷岩の上に乗っており、悪コンディションである。プッシュにビレイし、壁を 5 ピッチ、2 時間をかけて、第一の難所通過。昼食。ついさっきまで安定していた天気が崩れだしたので、食い終わるや登攀開始。向かいの尾根の平井と樋口の「バックヤロー、頑張れ！」に一步



赤沢岳・スバリ岳周辺概念図 日本登山体系（白水社）赤沢岳・スバリ岳による
 （なお、当時、黒部湖は存在していない。）

一步前進。途中立派なカミンがあったが、リスが見当たらず断念する。第二の難所の雪稜に向かう頃から、小雪まじりの強風となり五体にはこたえたが、プロテクトの連中の声援により、かえって我々の登頂への情熱をそそった。雪稜は3ピッチで通過し最後の悪所である雪稜から岩稜へ出ると

ころは、ようやく見つけたリスにハーケンを打ち、やっとのことで岩稜へ出た。あとは慎重に登る。猫の耳南峰、3時35分、北峰4時。しばし茫然。無言の握手。ザイルを解き、赤沢岳頂上のテントへ向かう。テントは暖かいクズ湯が私たちを待っていた。



利尻岳南稜

登って雪のバンドに集まった。

休むまもなく、雪を切り落としては前進。おりから風雪と化した本峰バットレスを完登し、午後3時、頂上に立った。濃霧に視界をはばまれて、むなしく時間が経過す。頂上ビバークと決し、岩

壁にそって穴を掘り、夜の寝床とす。

サポート隊は、午前8時、出発。登山隊がバットレスのクラックを乗り切った合図を受け、山本確保で奥原がフィックスザイルを外して、引き上げた。C2を撤収すべく努め、夜に入る寸前、C1到着。山本、奥原は雪洞に留まり、小山、遠藤は鬼脇村へ下る。登頂隊未着。

4日、登頂隊、5時ビバーク地をあとに、濃霧と烈風の東稜を下降、鬼脇へ向かう。

サポート隊は、C2、C1を撤収、夕闇迫る頃、太田、小松に迎えられ、談笑のうちに、夜の鬼脇へ全員無事到着した。

7日、1ヵ月余にわたり滞在した島を離れるときがきた。



●当時の初登者の小松英夫さん平沢行哉さん

前穂高岳東壁右岩稜左カンテ初登攀

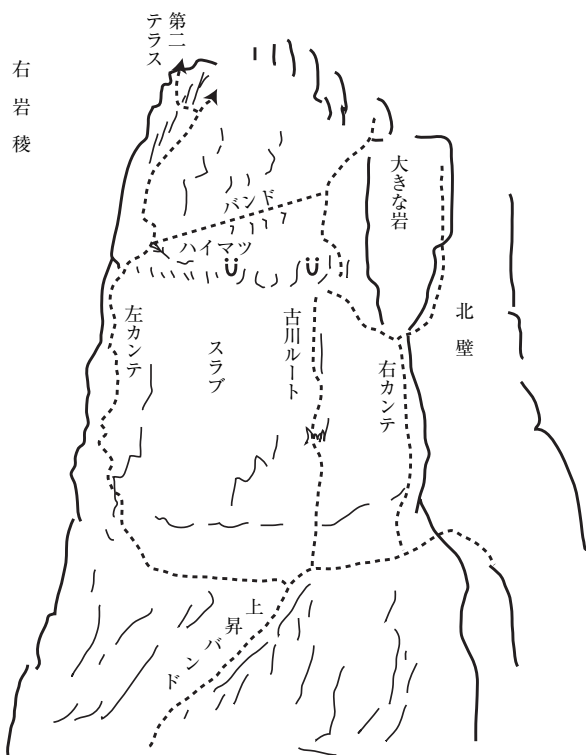
昭和37(1962)年8月15日

山田和彦
池田直弥

あたり一面ガスの海で、目指す右岩稜はテントから見えない。心は引き締まり、果たしてツバイで登り切れるかどうか不安な心を抱いていたが、やれるだけやろうと再び決意を新たにして、右岩

稜取り付き点より山田さんを送り出した。

ノルマルルートより取り付き、途中から左カンテの方へトラバースして移る。あたり一面ガスで岩と対決しているのみ。Cフェースを登攀中の掛



岳人、1966年7月号、223号 山田和彦著「前穂高東壁」より

け声が時々霧の中から聞こえて来る。

山田さんはいつもより慎重にルートファインディングしながら登っているので、ザイルはなかなか伸びない。カンテ最初のオーバーハングに都立大の三段アブミがあり、それを使って乗り越す。

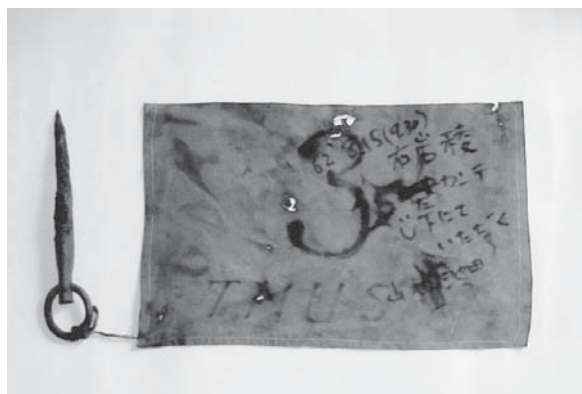
池より見る右岩稜は、スベスベしていて、取り付いたら滑り落ちそうな気がする岩稜だが、取り付いてみると、ホールド、スタンスもあり、岩も固く、浮石、草つき、ハイ松のある岩壁である。大体半分を終了した頃より霧が晴れ、奥又白、梓川が眼の下はるか彼方にあり、やっと立てるスタンスでジッヘルしながら、首が疲れると下を見ては背筋がゾーッと、今日の梓川は昨日とは違うと思ったりした。ザイルの垂れ下がったところに来たときは、青空も見えだし、いくらか緊張感がほぐれてきた。

あと左カンテを一ピッチで抜けそうだと見とおしがついたので、最後のピッチだと心を引き締め、多大なファイトを抱き、山田さんは垂れ下がったザイルを使って20m位登る。“ザイルの垂れてい

る箇所は一本のピトンもないぞ。人間なんて現金なものだなアー”と言いながら山田さんは登っている。その上に5、6個のアブミがある。きっとこの夏にこのルートを目指し、行き詰まり、アブミを回収する余裕もなく、退却したパーティーなのだ。それは生き抜いた証拠となっている。

山田さんは、ハーケンとアブミに導かれて、一番上にあるアブミに乗っている。“この上にはハーケンは一本も無い。さアー頑張るぞ！しっかりジッヘルしろ！”とトップの尻を見上げている僕に言葉が来る。“よしっ！”緊張する。カラビナがすでに10個以上掛かっている、ぐにゃぐにゃ曲がっている、ザイルの滑りが悪く苦心している。

両足をアブミに乗せた身体は完全に岩から離れ、その姿勢でハーケンを打ち、疲れると“休む”と僕の方に声を掛けて少し笑っている。もう10mも登れば右岩稜も終了なのだろうか。リスを探し、不自由な姿勢でハーケンを打っては進むトップ！まだ人類の手足が触れたことの無い箇所にルートをつけるべく頑張っている。“万が一、トップが……”と思わない訳にはいかない。アブミ3個にカラビナ数個をかけて、最後の10mを登り終えた山田さんから“ジッヘル体勢に入ったが、ザイルが全然来ないので、池田！自力で登って来い”と言ってきた。これは大変なことになったぞと内心想ったが、大きな声で“よし。じゃー自分でのんびり登ります”と返事をかえし、右岩稜の最悪の箇所を自力で登れるという幸運をつか



●回収したハーケンとフラッグ

んだことは、心の片隅ですこしは喜び、“よし、やってみようぞ！”と決意を新たに登り、アブミも乗っては余ったザイルを身体に巻きつけ、遊んでいるザイルを無くしながら、カラビナ、アブミを回収して登る。回収に力を使い果たし、途中2回ほどアブミのうえで休む。アブミ、カラビナ、ザイルで重くなった身体を山田さんのところに見せたととき、“ご苦労さん、よくやった”と言って、握手

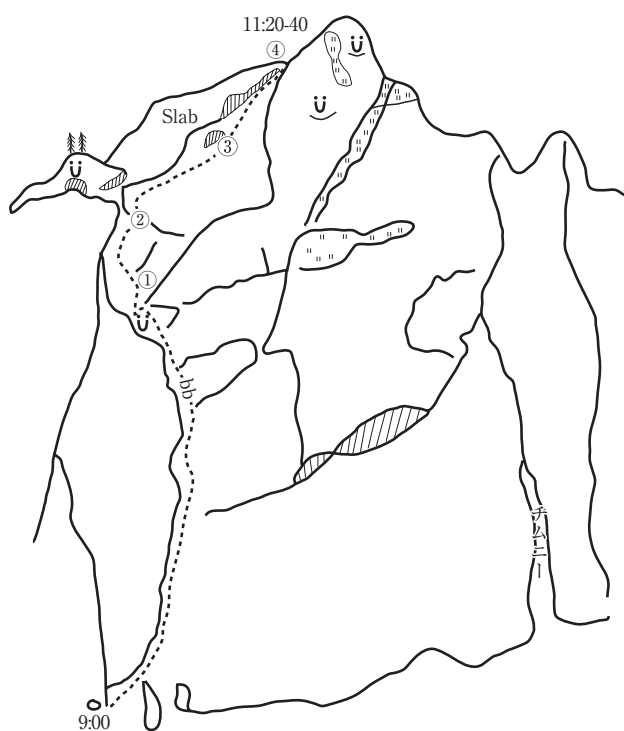
を求められたときは、天にも飛ぶほど嬉しかった。
(池田記)

挿入写真は、その時回収したハーケンとフラッグで「奥又白合宿」唯一の思い出の品物です。そのフラッグには「62.8.15 (9:30) 右岩稜 左カンテ オーバーハング下にいただく。山田、池田」と書いてあります。——

前穂高岳北尾根第六峰奥又白側岩壁初登攀

昭和37(1962)年8月16日

出島五郎
池田直弥



六峰コンタクトルート

雲ひとつ無い、カラッと晴れたキジ山のもとで朝食、5・6の科尔へ向かう。制限時間いっぱいとなり、二人ともお花畑でキジを撃つ。科尔より20分くらい、ガラガラの沢を下り、尾根を一つ

越えて六峰岩壁の基部へ着く。下から見る六峰は大きい。

トップ出島、最初のハングを吊り上げて越し、二番目のハングは、ハーケン、リスなく、じわじわと身体フリクションを使って乗り越した。岩は固いが、パリッと剥がれる岩もあり注意を要した。

ニピッチ目、トップ交代。四峰明大ルートのような感じのするところ。奥又白池が見えてきた。三ピッチ目、再びトップは出島。忠実にコンタクトを登る。三日月洞穴のあたりより岩が脆くなる。四ピッチ目、池田トップ。岩の崩壊が激しい。ハング下にリスをやっと探しあて、ハーケンを打ち、安心感を得て、かぶり気味のところを乗り越し、再び固いしっかりした岩を登り、登攀終了となる。登攀終了点から縦走路までトラバースして、六峰頂上まで10分かかった。

土も草つきも無いのが、このルートの特徴で、ハングを乗り越すあたりに、あまり良いホールド、スタンスが無いほかは、豊富にあり、すっきりした岩登りが出来たことは嬉しかった。アブミは持っていったが、使用しなかったということは、

ルートの中にある三つのハングは、ハング気味と
いったほうが良いかもしれません。

BC 発 (6:50) - 取り付き (9:00) - 登攀終了 (11:
10) - 六峰 (11:40)

前穂高岳東壁 D フェース信大ルート開拓

昭和 39 (1964) 年 8 月 9 日、10 日

片岡 格
小谷雅宣

登攀記録、片岡 格氏の追悼文集から

小谷雅宣

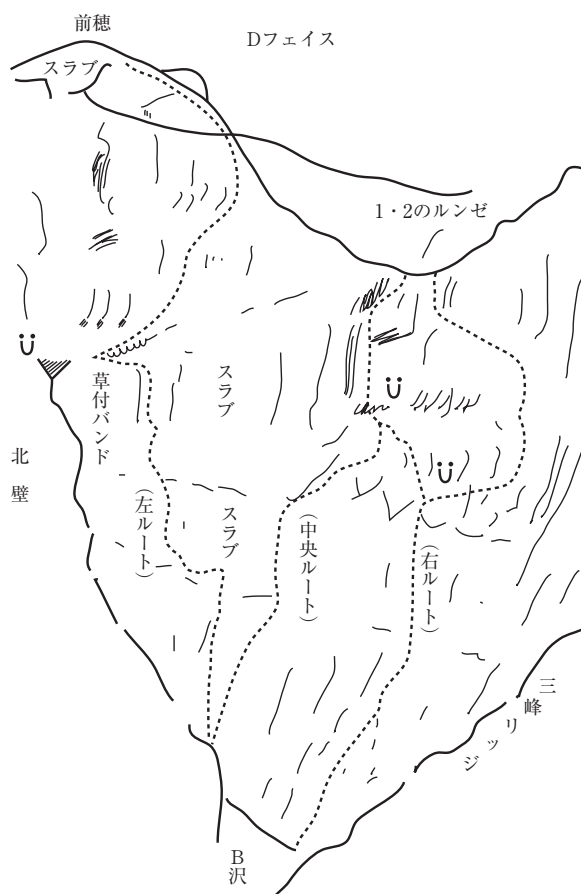
格さんとザイルを組んだのは、初めてにして最後のものになってしまいましたが、昭和 39 年 8 月の奥又白岩登り合宿でした。前年に、山田和彦さんに連れられて、途中まで行ったのですが、日暮れとなり引き返してきていました。再度の機会を捉えるべく、格さんとザイルを組むことになったわけです。

前年、途中まで登ったルートとはいいながら、他のルートとは異なり、ハーケンは殆ど浮いておりました。効かせたつもりハーケンにアブミを掛けたため、20m 位転落しましたが、無事止めていただいたということもありました。その後は比較的順調に進みました。上に登れば登るほど、格さんの身のこなしは鮮やかでスイスイといった感じでした。

昼をとっくに過ぎた頃ようやく中段の草つきバンドに着き、これからどちらへ行くべきかと上を見ると、ヒサシ状となっており、下は C 沢から本谷まで一直線という感じでした。

その後の草つきバンドの斜上トラバースから直登までの間は、格さんの独壇場で、猫のように身軽に登り、するするとザイルも延び、ついに直登できるところに到達し、取り付きからほぼ前穂高の頂上へ直接出るといったルートを登ることが出来ました。

夕暮れ迫る中を頂上に着いたときには、二人と



岳人、1966年7月号、223号 山田和彦著「前穂高東壁」より

も相当の疲れはあったのですが、格さんの「まだまだこれから」といった元気のよさに、その日のうちに無事又白池のベースキャンプに下ることが出来ました。



●ルート開拓中の片岡 下部に確保中の小谷が見える



●左側が新ルート 右側が中央ルート

片岡 格氏の追悼文集から

牧 晃一（故人）

私が新人のとき、ボッカのアルバイトで涸沢に行き、その帰路、5・6のコル経由で帰テンする途中、私は前穂高岳の北尾根にて、奥又白の岩場を胸躍らせて見ていた。

「あれが三峰リッジだジ。そうせ、奥又白へ入ったらまず最初にお参りするルートせ。

その隣が右岩稜、その向こうが北壁、その上部がAフェース、氷壁で有名なとこせ、そして右岩稜の右上のベラーっとしたハングの壁がDフェースせ、おっかないジ。すげーズラ、ヘー命が惜しかったらヘー止めとくせ」と信州弁の上手い上級生の説明を聞きながら、私は初めて見る奥又白の岩場に目を見張った。

その時であった。前穂高の頂上より北尾根を下ってきた見知らぬクライマーが声をかけてきた。「おたく信大さんですか。すごい所やりますな。Dフェースの新ルート開拓しておられるんですか。一足さきにやられましたな。成功祈ります」と、そのクライマーは我々に敬意を表して、足早に涸沢小屋の方に下って行った。

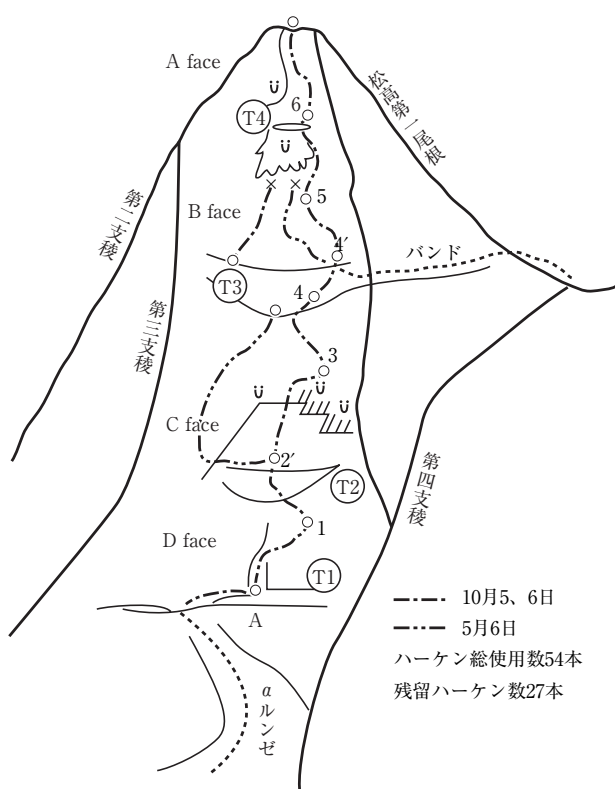
「エエッ！一体誰がDフェースの新ルートを開拓しているんですか」私は新人ながら何だか自分のことのように嬉しかった。

「信大山岳部はせー、日本一の山猿仲間なんや、登ろうと思えばどんな岩場でも登れるせー」と内心で呟き、急に顔がほころび、晴々とした気分になった。

翌日、奥又白のベースキャンプより、「Dフェース、新ルート（信大ルート）開拓に成功。片岡OB、小谷パーティーが完登」とのビッグニュースが届いた。

前穂高岳第一尾根下又白谷アルファルンゼ奥壁初登攀

昭和42(1967)年10月5日~6日

新谷 剛
岡村知彦

10月5日

涸沢で2、3日遊んでいたため、この日は早朝5・6の科尔を越え、又白池のテントで三つ道具を補充したりでテントを出たのは9時ごろになっていた。

第一尾根のピナクル下を回りルンゼに入ると、ルンゼ内はガラガラで崩れやすく、取り付きのT1まで達するのに一苦勞。T1の左方には柱状節理の下半が崩れ落ちて、小さな岩小屋が2つ出来ている。T1中央部の凹角で、アンザイレンし登り出す。取り付きが東壁Aフェースの取り付きとよく似ているが、少しルートをはずれると浮石

が多く、嫌な所だ。2ピッチでCフェースの基部へ。

5月の試登のときは、ここまで雪に埋もれていた。そして中央のオーバーハングのところへ上から落石が集中していたので大きく左に巻いて登ったが、今は落石も心配ないので、オーバーハングを苦勞して、おっかなびっくりアブミにぶら下がりながら登る。ちょうど甲南ルートのコル部程度の所と思われる。2ピッチでT3に達し、コンテニューアスでBフェース基部へ。試登のおりは、テラスの右方からハング目指して登ったが、今回は中央部からハングをダイレクトに登ろうと、ハーケンを連打して高度を稼いだが、ハング直下でハーケンが残り少なくなっており、おまけにミズレが降り出したので。アップザイレンでT3に戻り、バンドをトラバースして第一尾根に逃げた。

10月6日

昨夜のミズレが雪となり、テント付近まで白化粧。「雪が消えるまで待つベエ」とテント発が10時頃。第一尾根からトラバースしてT3へ。ハングをダイレクトに登るのは諦めて、テラス右方よりハング右端めがけて直上し、ハングを大きく回りこんでハング上のT4まで2ピッチ。Bフェースのルートは、マヤドコロのゲレンデの壁に似ているし、出口が右岩稜抜け出るところと似ているのが面白い。Aフェースは下からの偵察のとき心配していたが、Bフェースを出たとき、思わず「やった」と心の中で叫んだ。明大ルートのコル部程度の所なのだ。Aフェース最上部にケレンを積んで握手。また握手。ガスの切れ間にピナクルが圧倒的に聳えていたのが印象的だった。

外は吹雪。昨日も沈澱、今日も沈澱。
そんな時全員で唱ったのはこの歌だった。

信大山岳部数え歌（昭和 37 年 秋季奥又白岩登り合宿にて作成）

- 一ツとせ 人に知られた信大の 山猿仲間の数え歌
 そいつは豪気だね そいつは聞きたいね
- 二ツとせ 禪の紐を締めなおし すいすい登るは松高尾根
 そいつはしびれるね そいつはしびれるね
- 三ツとせ 見た目は雑いがデリカシー 星を眺めて涙する
 そいつはムードだね そいつはセンチだね
- 四ツとせ 横尾の出合いでチョット休み 後は槍までまっしぐら
 そいつは豪気だね そいつは頼もしい
- 五ツとせ いつもながらの奥又で ザイルさばきはお手の物
 そいつはお手の物 そいつはお手の物
- 六ツとせ 無駄飯喰ってはキジを打ち キジを打ってはまた喰う
 そいつは金がいる そいつは紙がいる
- 七ツとせ 夏の穂高でグリセード 転べばそのまま尻セード
 そいつはチョンボだね そいつは怒鳴られる
- 八ツとせ やっぱりやりたい麻雀を 穂高の頂上で一度はね
 そいつはズクがいる そいつはズクがいる
- 九ツとせ 凍るピオレを握り締め 歩む北尾根ブルウズラ
 そいつはオゾイワネ そいつはオッカナイジ
- 十とせ 遠く知られた夏テンで 可愛いリーベをパクろうぜ
 そいつは出来るかね そいつは無理だろう
- 終わりとせ 尾張名古屋は城でもつ 天下のアルプス俺（オラ）でもつ
 そいつは豪気だね そいつは豪気だね
- おまけとせ おらたの夢はヒマラヤで 山に“アラヨ！”を響かせる
 そいつは出来るかね そいつは出来るとも
 そいつは出来るかね そいつは出来るとも